

生徒教員対象地理夏季巡検
２２年７月２９日実施
“神流川をたどる巡検”
「みんなの安心・安全のためには？」
…防災と多文化共生の視点から」



図①高さ３倍の神流川扇状地（北東方向から３Ｄを鳥瞰）
下久保ダムの谷から流れ出る神流川が形成する扇状地
扇頂= 鬼石町・神川町
扇状地の範囲= **西側**: 鬼石町と「鎭川」を結ぶ線（本庄台地:古期神流川扇状地を含む）**北～東側**:「鎭川」「烏川」～「利根川」の流路。
南側: 神川町・児玉町・本庄早稲田駅・本庄駅を結ぶ線
扇端= 「鎭川」「烏川」～「利根川」の流路
現在の神流川流路＝鬼石町と「神流川」を結ぶ県境線

★神流川<ウィキペディアによる>
群馬県、埼玉県および長野県が境を接する三国山の北麓に源を発し北へ流れ、上野ダムにて堰き止められた奥神流湖から、後に東に流れを転ずる。途中下久保ダムによって堰き止められた神流湖から、群馬県・埼玉県の県境となる。下久保ダム直下の流域は三波石峡と呼ばれ、合流する三波川とともに三波石の産地として知られる。藤岡市のあたりから流れは緩やかになり、埼玉県に入って児玉郡上里町を流れ、同町と群馬県佐波郡玉村町の境界付近で烏川に合流する。
<国土交通省ＨＰによる>
『『美しき景観に、伝統を受け継ぐ優雅な川』
神流川は、三国山の西側より多野山地へ曲がりくねりながら流れ、下久保ダムを通り、群馬県と埼玉県の県境を流れ、新町地先で烏川に注いでいます。流域面積は 407km2、流路延長は 87.4km です。』

★本庄市<ウィキペディアによる>
地理と風土
埼玉県の北西部県境に位置し、北に利根川が位置し、市内中央部に JR 高崎線が、南部に関越自動車道と上越新幹線が東西に横断している。市街地は本庄駅付近に集中する。国道 17 号（本庄駅北側）より北部は畑が広がり、住宅密集地は本庄駅の南部方面に広がっている。本庄北部は畑が広がっているために、風をさえぎる物がなく、秋冬では西風が強い。

ウィキペディアと企業・行政ＨＰによる
巡検参考資料



内陸の台地(北武蔵台地・本庄台地)で比較的安定した風土を保つ。旧市内域（児玉町合併以前）では、3 分の 2 が台地上に当たる。一方で、児玉南部方面は山麓地帯であるために、夏場の山間部では山間独特の湿度の高さがあり、土砂崩れもみられる。

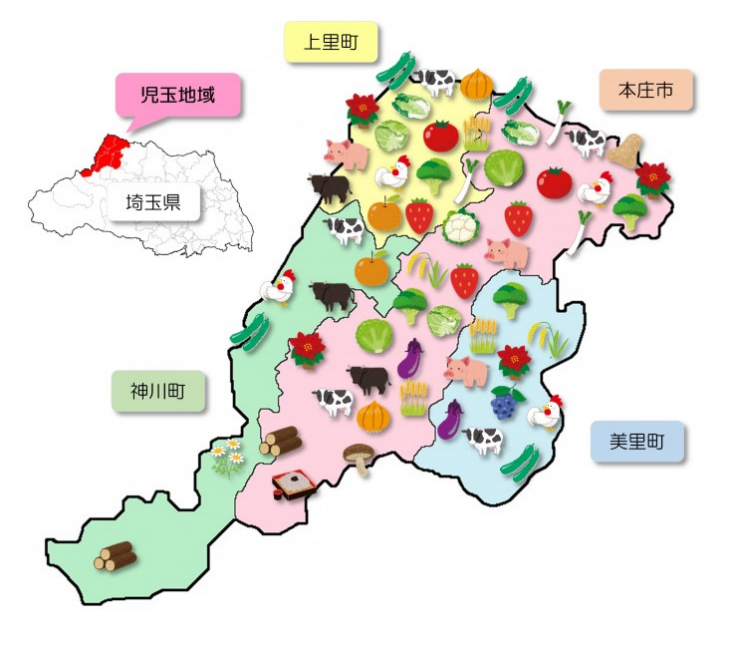
歴史
本庄の古墳時代の特色として、旧児玉町下浅見の鷲山古墳が 4 世紀中頃（333 年 - 366 年）まで遡る県内でも最古級かつ最大（全長約 60m）の前方後方墳であり、本庄の大久保山古墳群の前山 1 号墳は県内最大の前期前方後円墳である。平安時代にこの地域を割拠した武蔵七党の最大勢力を有した児玉党を構成する（かつ党首でもあった）庄氏本宗家が当地に館を築き、鎌倉時代に庄氏から派生した本庄氏がこの地に土着した事が地名の由来である。12 世紀頃、武蔵七党中最大の武士団である児玉党の本宗家 4 代目庄太夫家弘が現在の本庄市栗崎の地に館を築く（以降、本宗家の領地となる）。13 世紀頃、庄太郎家長の四男、時家が本庄氏を名乗り、現在の本庄市北堀の地に館を築く。15 世紀には本庄氏の城下町であったが、のちに小笠原氏の城下となり、16 世紀の終わりには本庄藩が生ずるも 17 世紀初期には廃藩となった。中世に武家の領地（城下町）として始まり、近世では宿場町として栄え、商人の町として発展し、戸谷半兵衛と言った豪商も輩出している。18 世紀には中山道で最大の宿場町となり、各地から人や物流が集中した。明治以降は生糸・絹織物の産地として栄え、工場も建てられるようになり、東諸井家など日本の近代化に貢献した一族も輩出した。



本庄まつり

★児玉地域の農業<県ＨＰによる>
児玉地域では、本庄市や上里町を中心に、ねぎ・なす・ブ

ロッコリーなどの露地野菜やきゅうり・トマトなどの施設野菜の生産が盛んです。畜産は全市町で大規模経営が営まれ、牛肉や豚肉の加工販売に取り組む農家もあります。米麦は二毛作が中心で、上里町は全国屈指の小麦種子産地となっています。また、美里町では飼料稲生産が集团的に行われ、町内外の畜産農家に供給されています。花きは、本庄市を中心に鉢物、神川町では切り花の生産が盛んで、県内有数の産地を形成しています。果樹は、神川町、上里町で梨（幸水・豊水・彩玉等）の栽培が 行われています。 また、美里町ではブルーベリーが全国有数の面積（約 34ha）で栽培され、観光農園や直売が盛んに行われています。



★本庄市児玉町<ウィキペディアによる>
旧児玉町
児玉町（こだままち） は、埼玉県北西部、児玉郡にあった人口約 2 万 1 千の町である。2006 年（平成 18 年）1 月 10 日に（旧）本庄市と合併（新設合併）し、新たに本庄市（本庄市の一地区）となったことに伴い消滅するが、住所は依然として「本庄市児玉町〇〇」と「町」を含め表記する。

農業
『大日本篤農家名鑑』によれば児玉町の篤農家は、「井田春太郎、島田伊與太郎、岩岸和七、中林義國、岩崎金三郎、伊予部平吉、浅見平三郎、倉林八太郎、青木浅次郎」などがいた。
雉岡城
雉岡城（きじがおかじょう）は、武蔵国児玉郡八幡山、現在の埼玉県本庄市児玉町八幡山 446 他に所在していた日本の城。埼玉県指定史跡。別名を八幡山城（はちまんやまじょう）と言う。

概要
山内上杉家によって児玉郡八幡山の独立丘陵に築かれた城ではあるが、鎌倉時代には武士が居住していたと考えられており、城としての形態に整備されたのが室町時代末期とされる。築かれた目的は、鎌倉街道の交通要衝を押さえ、関東管領上杉家の最前線地となっていた五十子陣（児玉郡北部）への兵站を確保する事であり、そうした経済的側面があったものと考えられている。つまり、当初は五十子陣の支城と

しての役割があった。五十子陣の解体後、上野国平井城の支城として活動し、後北条氏の時代では鉢形城の支城として活動したとされる。150 年近い歴史をもち、最終的には松平家 1 万石の城となり、八幡山藩が立藩するものの、江戸時代をむかえる前に廃城となった。

地理・構造
城の東側には鎌倉街道上道が南北に通っており、東西北の三方に堀を構え、南の一方のみ平地に続き、大手口があり、大手前に馬出跡がある。南側から本丸・二の丸・三の丸の順に連なり、ほかに伯耆曲輪・馬出などの郭から成る。江戸時代初期の廃城後、城内の建造物は取り壊されたが、堀、土塁は残った。江戸時代後期には旧城域の一部が開墾され田畑となり、明治時代に入ると、三の丸一帯に児玉高等女学校が建設された。
現在、本丸・二の丸は本庄市立児玉中学校、三の丸は埼玉県立児玉高等学校となっているが、南東側の数郭は「雉岡城跡公園」として整備され堀や土塁の遺構が残り、塙保己一記念館が建てられた（2015 年アスパアこだま内に移転）。
競進社模範蚕室
競進社模範蚕室（きょうしんしゃもはんさんしつ）は、埼玉県本庄市に所在する木造建築物。日本近代化の遺産として知られ、埼玉県の有形文化財に指定されている。

概要
木村九蔵（高山社創設者・高山長五郎の弟）が創設した競進社に関する文化財である。世界遺産富岡製糸場と絹産業遺産群と共に、関連文化財として観光案内されることが多い。1884 年、児玉町に競進社の伝習所が開設され、1894 年に模範蚕室が建造された。児玉町は合併により本庄市となっている。
競進社養蚕学校を前身とする埼玉県立児玉白楊高等学校には競進社資料記念館が設置されている。



競進社模範蚕室

★塙 保己一
塙 保己一（はなわ ほさいち、延享 3 年 5 月 5 日（1746 年 6 月 23 日）- 文政 4 年 9 月 12 日（1821 年 10 月 7 日））は、江戸時代の国学者。武州児玉郡保木野村（現在の埼玉県本庄市児玉町保木野）に生まれる。塙は師の雨富須賀一の本姓を用いたもので、荻野（おぎの）氏の出自。近世に帰農した、百姓の家系であるという。『群書類従』『続群書類従』の編纂者である。総検校。
埼玉県立盲学校は**埼玉県立特別支援学校塙保己一学園**と**改称**され、同校は、人物のフルネームを校名にした日本で唯一の学校である。



塙 保己一

★神川町

神川町（かみかわまち）は、埼玉県の北西に位置し、児玉郡に属する町。人口は約1万3千人。南側の秩父市、秩父郡皆野町と三市町の範囲が重なる点に城峯山がそびえている。中部の群馬県藤岡市との境界に神流川が流れ、下久保ダムによって形成された神流湖がある。2006年（平成18年）1月1日、隣接する神泉村との新設合併により、新たに神川町となった。

★上武鉄道と朝日工業



上武鉄道＜ウィキペディアによる＞

上武鉄道（じょうぶてつどう）は、埼玉県児玉郡神川町の丹荘駅と西武化学前駅の間を結ぶ鉄道路線（日丹線）を運営していた鉄道事業者である。1986年（昭和61年）に鉄道路線を廃止し、以後も群馬県高崎市倉賀野に本拠を置く通運会社として存続していたが、1998年（平成10年）に解散公告を行い事業を停止している。もとは、太平洋戦争中の1942年（昭和17年）に、日本ニッケル株式会社が群馬県多野郡にあった多野鉱山、ニッケル精錬所と神流川を隔てた埼玉県児玉郡にあった若泉製鋼所の専用鉄道として敷設した鉄道である。戦後、軍需物資の輸送に頼っていた鉄道の維持が困難になっていたことと、沿線自治体の要望により1947年（昭和22年）5月に地方鉄道に転換し、旅客営業を開始したもので、運営は日本ニッケル鉄道部（通称日本ニッケル鉄道と呼ばれた）が行った。

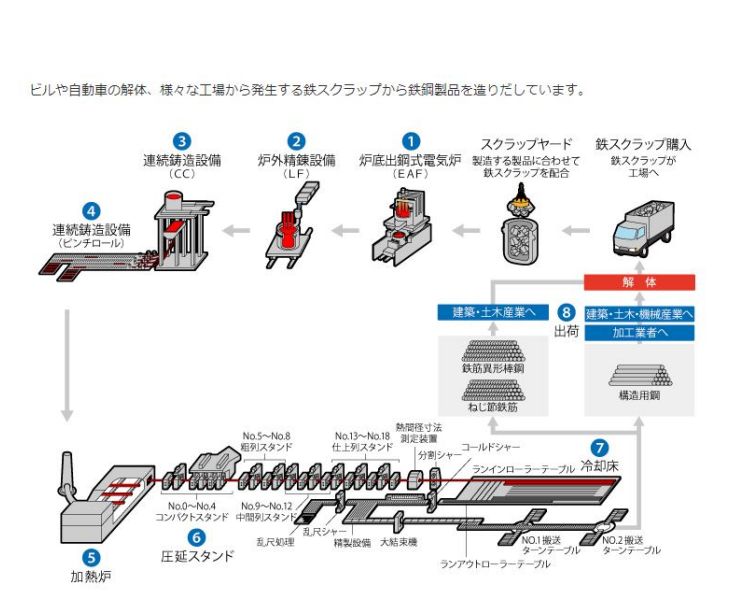
1960年（昭和35年）に日本ニッケルの鉄鋼部が朝日化学肥料に譲渡され、西武化学工業（現・朝日工業）が発足したことにもない、日本ニッケルの一組織であった鉄道部が独立し、1962年（昭和37年）に上武鉄道となった。



多野鉱山(現在廃墟)



上武鉄道の蒸気機関車



現在の工場社屋

朝日工業株式会社（あさひこうぎょう、英文社名 Asahi Industries Co., Ltd.）は、東京都豊島区に本社を置く電気炉メーカー。主に異形棒鋼の製造を行っている。鉄鋼建設資材事業比率70%。<ウィキペディアによる>（おもな生産品）<企業HPによる>

異形鉄筋		ねじ節鉄筋「ネジエーコン」		構造用鋼	
------	--	---------------	--	------	--

<作成者による>

1935年、現工場の対岸にあるニッケル鉱山の多野鉱山の鉱石を精錬する事業所として操業を開始、現在の朝日工業は鉄スクラップから電気炉を用いて鉄筋コンクリートに用いる鉄筋を生産している。1970年に西武流通グループ(セゾングループ)傘下となり、1970～80年代の上武鉄道最終期には廃車になる国鉄車両を解体、スクラップにするための引き込み線の役割も果たしていた。上武鉄道の線路跡は現在遊歩道や道路になっている。



現在も残る踏切のあと

★下久保ダム<国土交通省関東地方整備局HPより>ダムについて

上武国境の美しい山々に囲まれ、三波石渓谷の独特の景観を織り成しています。下久保ダムは、神流川に位置する重力式コンクリートダムで、昭和36年から下久保ダム工事事務所により建設が始まり、その後、水資源開発公団発足に伴い、昭和37年10月水資源公団下久保ダム建設所に引継がれ、昭和44年に竣工し、水資源公団下久保ダム管理所により管理を開始しました。

ダムの目的

1）洪水調節
治水容量3,500万m3を利用し、ダム地点の計画高水流量2,000m3/sのうち1,500m3/sの調節を行います。
2）流水の正常な機能の維持
利水容量（洪水期8,500万m3、非洪水期12,000万m3）を利用して、既得用水の安定化及び河川環境の保全等のための流量を確保します。
3）都市用水の供給
利水容量（洪水期8,500万m3、非洪水期12,000万m3）を利用して、東京都の上水道12.6m3/s及び埼玉県の上水道2.3m3/s、工業用水1.1m3/sの合計16.0m3/sの取水を可能にします。
4）発電
最大出力15,000kWの下久保発電所を新設し、発電を行います。また、下久保第二発電所を新設して最大出力270kWの発電を行います。

ダムの諸元

型式：重力式コンクリート
堤体積：1,345千m3
堤高：129m
堤頂長：598.2m
貯水池名：神流湖
流域面積：322.9km2
湛水面積：約3km2



★譲原地滑り

利根川水系砂防事務所では、藤岡市の譲原地区において、大規模な直轄地すべり対策事業に取り組んでいます。地中へ水がしみ込まないように地表面に排水路を作ったり地中の地下水を集めて抜き取るための井戸や排水トンネルを作ったりします。さらに、地盤の動きを止めるために、地表面から土中深くまでとどく丈夫な杭をたくさん打ち込んだり地すべり斜面の下の方で、地盤を固定するための工事を行う予定です。

★三波石<神川町HPより>と冬桜

三波石峡・三波四十八石

登仙橋から下久保ダムまでの約1.3kmの三波石峡は、国の名勝・天然記念物にも指定されている美しい渓谷です。「三波四十八石」といわれる48個の巨岩・奇岩にはそれぞれ名前がつけられています。

三波石とは

「三波石」とは通称です。「御荷鉾緑色岩類」「三波川結晶片岩類」「珪質岩」「輝緑凝灰岩」等の岩石を含めて「三波石」と呼んでいます。緑、黄、白が織りなす美しい模様の三波石は、江戸時代から名石として庭石などに使われてきました。現在は天然記念物として保護され、石の採集は禁止されています。

神川・鬼石の冬桜＜作成者による＞
神流川の渓谷中腹では初冬の気温逆転層によって桜の開花が見られ紅葉と桜が同時に楽しめる。両町それぞれに観光公園がある。



地域から社会を見る視点例

～児玉にあるベトナム仏教寺院と人々～

★ベトナム仏教寺院大恩寺

ベトナム仏教<ウィキペディアによる>

ベトナムは歴史的に仏教徒の国家であるが、中華帝国の直接・間接支配も含めベトナム仏教が中華思想の多大な影響を受けてきた。ベトナムの仏教は、日本や朝鮮半島と同じく、基本的には大乘仏教であり、中国系の儒教思想の仏教である。道教などとも混交しており、日本のように宗派には基本的に分かれていない混然とした形態である。あえてその特徴を挙げれば、宋代以降の中国仏教と同じく、禅宗（臨済宗）と浄土教の色彩が濃い、「浄土禅」的性格が比較的強い。

★ベトナム人の駆け込み寺としての大恩寺

コロナ禍でベトナム人の“駆け込み寺”が苦境に

2020 年 12 月 21 日
NHK 埼玉首都圏ネットワーク WEB リポートより



「私もずいぶん疲れました。助けてあげたいという気持ちは山々ですが、本当に限界があります」こう語ったのは、コロナの影響で生活に困ったベトナム人が集まり、「駆け込み寺」となっている埼玉県内の寺の住職です。いわゆる第3波の影響もあって、いま寺に助けを求める人が急増。支援が長期化する中で、無料で食事と住まいを提供してきた寺も苦境に立たされています。

（さいたま局／記者 大西咲）

ベトナム人が暮らす「駆け込み寺」

多くのベトナム人が集まる埼玉県本庄市にある大恩寺。住職を務める在日ベトナム仏教信者会の会長のティック・タム・チャーさんは、生活に困った人は断らずに、受け入れてきました。

コロナの影響で生活に行き詰まったベトナム人が、SNSなどを通じて次々と集まり、「駆け込み寺」となっています。



次の仕事が見つかるか、帰国するまでの間、寺で暮らしてもらい、食費や家賃などはすべて無料です。これまでにおよそ600人を受け入れ、取材に行った今月中旬の時点で、およそ40人が寺の部屋などで共同生活を送っていました。

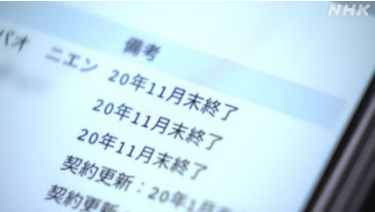
突然の契約終了 帰国もできず駆け込んだ

11月、大恩寺に駆け込んだベトナム人のファン・フィン・バオ・ニエンさん（29）です。日本語を学ぶため5年前に来日しました。都内の大学を卒業したあとは、就労ビザを取得し、介護施設や電子部品のメーカーなど、さまざまな仕事を経験しました。



この春からは、都内のスーパーマーケットで派遣社員として働いていました。客から「ありがとう」と言われることが何よりもうれしく、やりがいも感じていました。

しかし、先月1通のメールが届きました。目に入ってきた「契約終了」の文字。11月末で契約が終了となったのです。



頼れる家族や親戚もおらず、帰国したいと考えましたが、コロナの影響でベトナムに帰る便は限られ、すべてチャーター便で、格安の航空チケットはありません。

都内のアパートの家賃も払えなくなり、寺に駆け込んだのです。

ファン・フィン・バオ・ニエンさん

「大学では経済を学び、スーパーでは、品出しとか入荷とか色々なことをやりました。契約終了は、突然のことでびっくりしました。日本で生活するのに、お金がないのは本当に辛い。ここでは家賃はかからないし、食べ物もいただけるので、本当にありがたいです。」

コロナで生活に困るベトナム人が急増

ニエンさんのような人は、コロナ禍で急増しています。

厚生労働省によりますと、新型コロナウイルスの感染拡大で業績が悪化した企業などから解雇されたり、契約を更新されない「雇い止め」にされたりした人は、見込みも含め7万5000人を超えています。

大恩寺で暮らすベトナム人も、一時10人以下に減りましたが、“第3波”の影響で先月末からどんどん増え、先週だけでも15人が来ました。

大恩寺住職 ティック・タム・チャーさん

「以前は行事や週末のときに集まるだけでした。しかしコロナで仕事がなくなる人も多く、住む場所がない、お金がない、そうなるとベトナムの人は、お寺がよりどころとなって相談しに来て、次々に集まるようになった」



水道・光熱費は20万円 以前の7倍に

この寺では、食事の準備も交代で行い、みんなで助け合いながら支えています。

集団生活でコロナの感染拡大を防ごうと、ご飯を食べるとき以外はマスクの着用を徹底。新しく来た人は、数日間テントで暮らしてもらい、発熱など異常がないか確認したうえ、共同生活を始めます。

「困った人の力になりたい」と、来る人は拒まないといいますが、寺の負担は膨れ上がっています。



コロナの影響が出る前は、水道と電気、ガスなどの光熱費は月に3万円ほどでした。

しかし、今はあわせて20万円以上と7倍ほどに増えました。さらに、食費も合わせると、寺の負担は月40万円以上になるといいます。



寺では、各地のベトナム人などから寄付などを受けて運営していますが、支援を続けていくのも限界があると感じています。

大恩寺住職 ティック・タム・チャーさん

「ベトナムから来た若い人たちは、日本に来てたくさん夢を持っていますので、できればたくさんの人を助けたいと思います。しかし、私もずいぶん疲れました。助けてあげたいという気持ちは山々ですが、自分も本当に限界があります」

気づきにくい外国人コミュニティ 支援の動きも

こうした苦境を助けようと、支援の動きも始まっています。

さいたま市にある食糧支援を行うフードバンク埼玉の永田信雄さん。永田さんたちは、12月6日、企業からの寄付などを通じて集めた、コメや缶詰などお





よそ400キロの食料品を寺に届けました。

フードバンク埼玉では、これまで支援の対象は、主に生活が苦しい、日本人の家庭でした。外国人コミュニティの問題は、気づきにくく、支援の手が回っていなかったと言います。

永田さんは、コロナの影響で大恩寺が困っているという話を知り、支援を行う必要があると考えようになったと言います。

フードバンク埼玉 永田信雄さん

「これまでは、在住外国人の団体から、連絡待ちだったというか、受け身の姿勢だったと思います。同じ埼玉にいな

がこんな大きな問題になっていたということを知ったので、連帯できるそういう仕組みを作らないといけないなと思っています」

永田さんたちのもとには、今回の寺だけでなく、難民として県内に住んでいるクルド人など、ほかの外国人グループからも支援を求める声上がり、今後、支援を検討しています。

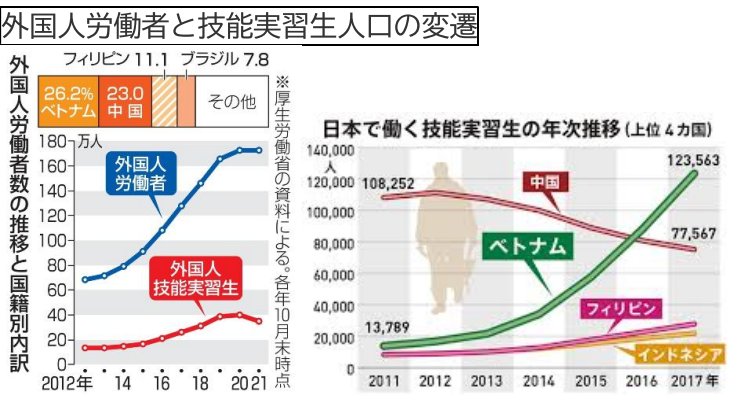
広がる支援で多くの人を助けたい

多くのベトナム人を受け入れてきたチャーさん。ベトナム人どうしのコミュニティだけでは限界があり、幅広く支援が受けられればと考えています。多くの人から支援を受けることで、より多くの人、さらにベトナム人以外も幅広く支援したいと考えています。

大恩寺住職 ティック・タム・チャーさん

「コロナですから、大変なのは誰でも同じで、もちろん日本人の皆さんも大変です。日本に住んでる外国人の皆さんも大変です。みんな大変な状態ですが、できればたくさんの人を助けたいのです。ベトナム人だけでなくほかの国の留学生も支援したいです。また困っている日本人も支援したい。皆さんの力を借りて、もっともっと大きな活動をできと思っています」

これまで日本で暮らす外国人たちは、同じ仲間のコミュニティで支え合うことが多かったといいますが、コロナの影響が長期化する中、支援の輪を広げていかないと立ち行かない現実がありました。



問い：この見学から多文化共生のヒントとなる学習活動や探究活動を構想しよう